

武蔵野日曜集会

キリストの僕

――ロマ書第1章1～7節――

1978年1月15日(武蔵野)

小池辰雄

第一の都ローマ 生きた神学 魂が毎日これを食らう エホバの僕 霊撃 ひっくり返り バ
カにならなければ 本当の「自由」 キリスト僕・キリスト婢 使徒 福音の中へと キリス
トという福音 矛盾の構造 死に至るまで二重構造 聖名が中心 召団 罪からの自由・愛へ
の自由

【ローマ1:1～7】

1キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選び別
たれたるパウロ――2この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預め
御子に就きて約し給いしものなり。3御子は肉によれば、ダビデの裔より生
まれ、4潔き霊によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給
えり、即ち我らの主イエス・キリストなり。

5我等その御名の為にもろもろの国人を信仰に従順ならしめんとて、彼よ
り恩恵と使徒の職とを受けたり。6汝等もその中にありてイエス・キリスト
のものとならん為に召されたるなり――7われ書をロマに在りて神に愛せられ、
召されて聖徒となりたる凡ての者に贈る。願くは我らの父なる神および主イ
エス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

●第一の都ローマ

今年にはローマ書をやることになりました。今年の著作集は、マルチン・ルターを書くわ
けです。彼の宗教改革の土台となつてるところの註解がローマ書であります。彼は主と
してローマ書によつて――詩篇もありますけれども――福音の根本を掴まえ、またガラテ
ヤ書によつて非常に戦闘的に宗教改革を展開していった。そういう関係もありまして、ロー
マ書に決めたわけです。

ローマ書というのは、いつどこでどういうようなご連中に書かれたか、というようなこ
とから言わなくてはなりません。ローマの教会というのはパウロが建てたのではない。また、
誰が建てたか今でも学問的にわからない。ただ、パウロによつて小アジア半島またペルポ
ネソス半島に、第一回、第二回、第三回の伝道がなされた。それによつて異邦人が、それ



それぞれの宗教から改宗してキリスト教に移った。またユダヤ教のご連中が新しく福音を受けとった。異邦人キリスト者とユダヤ人キリスト者が混ざって、当時の世界の第一の都ローマにおいて集会を形成したというように想像されているわけです。内容を読んでみると、確かにそういうご連中を相手にして、パウロがどちらに対しても語っている。また、旧約と新約がどのように違うか、福音と律法がどのように違うかということを、両者に対して徹底的に語っている。

パウロはそういった教会ができたことを知って、どうしてもそこに行きたくてしようがない。世界の第一の都に大きなしつかりとした教会としたいという念願を彼は持っていたということが、ローマ書の中に書いてある。彼らが本当に聖霊を受けているか。聖霊の事態において本当に確かめ、また強くしてやろうということも、彼は初めと終りの方に二度書いています。

そして、またもう一つは、イスパニヤの方にまで向かって伝道したい。これからの伝道の根拠地として、また途中の接合点としても、ローマは大事な所だという気持ちもありまして、いろいろな内容上、また時間のカイロスの上からも、のつぴきならない気持ちでローマ書を書いたわけです。

三回伝道しましたが、これはもちろん第三回目(第三回)の伝道(第三回)のときです。コリントに滞在していた時、使徒行伝の20章のところに出ています。その時にこの手紙を書いたと、大体、学者はそういうように言っております。ケンクレア教会の女執事であるところのフィーベという人がこの手紙を書いて、ローマに持って行かせたというわけです。時間的に言うと、大体、紀元56、57年あたりのところ(第三回)です。エペソ、ピリピ、コロサイはなおそれよりか後になりますけれども。そういうことが具体的なローマ書の大体の輪郭であると思えます。

●生きた神学

ローマ書15章22節に、

「²²この故に、われ汝らに往かんと^せ為しが、しばしば妨げられたり。²³然れども今は此の地方に働くべき^{ところ}処なく、

「此の地方」というのはコリントのこと。

且つなんじらに往かんことを多年、切に望みいたれば、²⁴イスパニヤに^{おもむ}赴かるとき立ち寄りて汝らを見、²⁵ほぼ意に満つるを得てのち汝らに送られんことを望むなり。

ローマの人たちをかためてから、それから先に進んで行く。

²⁵されど今、聖徒に^{つか}事えん為にエルサレムに往かんとす。」(ロマ15・22～25)

第三次伝道の終りにはエルサレムの方に往きましたから、そういうわけで、パウロの手紙はみんな、その時その時にのつぴきならない前後の事情、



空間的・時間的な事情に迫られて、すべて書いたわけです。特別に暇があつて、神学論文を書こうなんていうことではない。ローマ書というのは内容的に言つて、新約聖書の一番重厚なもので、パウロ神学はいつもローマ書に帰つて問われるわけです。彼は神学者ではないけれども、生まの神学を持つている。「神の言」をドラマチックな構造において掴とらえているわけで、いわゆる論理じゃない。私は神学の一番本質的なすがたはやはりパウロのローマ書だと思つてゐる。いわゆる今の神学者が非常に論理的に、組織的に書くというようなこととは違う。そこに生きた神学とでも言うものがある。

1980年に内村鑑三、藤井武の50周年記念の意味で、私は『無の神学』（著作集第三巻）を書くつもりです。そういう下準備としても、是非ともローマ書をやつておかなければならぬ。不思議なことですね、まずルターをやつて——ちょうど哲学の方ではカントをしなければ進むことができないように——キリスト教神学の世界では、ルター抜きにしては進むわけにいかない。

神学はともかくも、皆さんと一緒にローマ書をじっくりと読むということは、皆さんにとつても非常に大事なことです。ですから、できるだけこの集会には来るように。

●魂が毎日これを食べらう

ルターが『ローマ書の序文』というのを書いている。その最初に、

「この手紙は新約聖書のまさしく主題となるところのものである。

一番大事な一篇であると。

そしてまた極めて純粋な福音である。このローマ書において現されているところの福音というものは確かに品格があり、また価値のあるものである。そして、このローマ書をキリスト者は単に一語一語暗記するほどにまで知るのみならず、毎日これを、ちよどパンを毎日食べるように、魂が毎日これを食べ、これと関わりを持つことを要するような、そういう手紙である」

と。そういう見出しでローマ書の序文が書かれている。ルターがこの解説の第一言にこういうことを言つてゐる。

「この手紙の総括、総体というものは肉の

「肉」というのは、生まれつきの自己本位の人間のことを「肉」と言います。

肉のあらゆる知恵と、またあらゆる義を、

人間的なそういった知恵だとか、義だとかいうものを

ぶちこわし、そいつを根こそぎにし、またそれを壊滅させるのがこの手紙の総括、本義である。」

と言つたような激しい言葉で言つてゐる。いかに「神の義」に生きなくてはならないか。別な言葉で言つと、いかにこのローマ書において「福音の義」が現れているか、ということ



とを言おうとしている。

●エホバの僕

本文に入ります。

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選び別
かたれたるパウロ

最初のこの出だしが、

「キリスト・イエスの僕であるところのパウロ」

と、一番先に自分を名乗っているわけです。

「われこそはキリスト・イエスの僕でござる」

と。あなた方は本当に誰に向かっても魂の底から言えなくては。だから、私は今日、この「パウロ」という言葉をこの後につけるのをやめた。我々自身がキリストの僕、キリストの婢はしためです。

この「キリストの僕」という、パウロのローマ書の最初の一言。私はイザヤ書の「エホバの僕」のところを話した時にここを引用して、パウロのローマ書1章1節のこの言葉は、「エホバの僕」のイザヤ書の精神をパウロはそのまま受けとって語ったように言いました。第二イザヤのあの「エホバの僕」の歌です。「実存者にしてわが主なる神の僕」とはキリスト自身です。イエス自身がエホバの僕として、イザヤ書の預言を自分に受けとられた。イザヤ書の預言を彼は満たした。その内容はエホバの僕として、もう一つは神の子として。この二つの面です。我々は今度は、パウロは「キリストの僕」です。

●霊撃

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり

とある。どうしてパウロは召されたんですか。これはパウロが立派だったから召されたんじゃない。パウロというやつはしょうがない野郎だ、キリストに反抗していた。造反の学生運動の真先に立つような青年だった。「ユダヤ教に反するやつはけしからん」というわけで、キリストを信ずる者たちを迫害していた。彼はいきり立って、どうにもならん。

だから、復活のキリストが——いいですか、復活のキリストですよ——復活のキリストが現れた。自らを啓示けいじした。キリストが現れた。啓示の宗教という。人間からの求めじゃないんだ。パウロは求めていなかった、反抗していた。「キリストをやっつけてしまえ」と思っていた。地上のキリストを彼は知っていたら、あの十字架にかける仲間の一人になったでしょう。彼はユダヤ教のチャンピオンだから。パリサイ人中のパリサイです。キリストの敵はパリサイ人ですから。パウロというのは敵の親玉なんだ。そういう器です。「召されて」と言ったって、調子のいい召され方じゃない。ひっくり返された。ひっくり返されて召された。



パウロはダマスコ途上でキリストにひっくり返されて、

「**なんぞ我を迫害するかっ!**」

という権威ある言葉にぶつかって、参ってしまった。霊に撃たれてしまった。霊撃されてしまったわけです。

どうして、クリスチャンはこのパウロの驚くべき事実に驚かないんですかね。自分は本当にそのようにして、生まれつきの自分がひっくり返されたかどうか。自分の聖書知識だとか、自分の何とかかんとかと、いつまで自分の実存の側をいろいろ問題にしているか。

だから、私は言っているんです。どんなに善さそうなことであっても——それ自身は相対的にはいいよ、悪くはない——けれども、それをまだ問題にしているうちは、本当の世界に入れないと。私はこんな激しいことを言うものだから、みんなに躓きになったりする。親切な体裁の良い牧師さんとは違うからね。私は躓きの石です。

●ひっくり返り

私はどうしても「無」ということを言わざるを得ない。さっき言ったルターはこの言葉が非常に愉快です。生まれつきの我というものや、肉というものや、その知恵やその義——人間的な義を相対的にみんな言っているんだ、「誰が立派だ。立派でない。どうのこうのと——そんなもんじゃないと、ルターが言っている。ルターは本当に自分の義を誇ることができた。パウロもそうです。一生懸命やった。だけれども苦しい。パウロはキリストにひっくり返された。ルターは独房でぶっ倒れた。そして、キリストの義、神の義がきて、

「**人間的な義は問題じゃない。今までのものは塵芥だ**」
ちりあぐた

と彼は言いだした。それだけの大きなひっくり返りをすれば、自分を絶対に何者ともしないというところになれば、もの凄いことになる。しかし、それを何かにやっているから、「でも、私は生れつきだいぶ才能がある」とか何だのとやってるから、いつまでたつても始まらない。そういうものを徹底的にぶちこわさなければダメです。

相対的な世界では、それでいいですよ。そうしたら、エラスムス(Erasmus)みたいに偉くなるよ。人間的なヒューマニズムのチャンピオンになる。ヒューマニズムのチャンピオンのエラスムスの『自由意志論』は相対的な世界では——ニュートンの物理学では——それは真理だよ。ところが、アインシュタインの物理学が出てきた。ルターの新しい「自由」が出てきた。

だから、私は著作集第四巻に『クリスチャンの自由』を絶対に載つけるわけです。そして、こちらの親鸞の『歎異抄』を載せる。こういう文字は、私は全身が燃えるね。天来の聖霊の火が燃える。

〔註：第七巻『聖書の人ルター』は1984年刊。第四巻は『詩篇珠玉集』1980年刊〕



● バカにならなければ

こっち側のものを、生まれつき持っているようなものを、そんな相対的なものをなぜ考えているかと。こういうことは平面論理ではわからないですよ。頭のいいやつにはわからないんだ、私みたいにバカにならなければ。

だから、東大生なんてはなかなか福音に入れない。頭が良いものだから。みんないわゆる唯物論理の、唯物史観に入ってしまう。

「お前たちは、魂がないのか。魂のない者は手を挙げろ」

と私は東大の学生に言ったら、魂が無いとは言えないものだから、誰も手を挙げない。

「それなら、魂はあるじゃないか」

と言う。私はそういう急先鋒の学生も真正面からやつつけてやる。時々後から、年賀状や、それから何かにぶつかると、

「やつぱり、小池先生は本当だっだ。あれだけ、情熱を傾けて話をしてくれたひと

はいない」

と言ってくるよ。

なにしろ、ルターにしろ、キルケゴールにしろ、また逆な意味ではニーチェにしろ、真理に燃えている人間は仕方がないんです、激しいことを言うから。その最大なのはキリストですよ。イエスの言葉は最も激しいですから。

「自分を憎まなければ、私の弟子になれない」

なんて、誰が言いましたか。

本当の世界に入れば楽でしょうがないんです。どうぞ、皆さんも烈々たるものを持ってください。なにもそれは現象に現れなくなつていいよ。けれども、浅間山や桜島のように、何か知らんが静かだけれども、煙を吐いているような。いざとなれば爆発する。時々、地震がくる。地震はいろいろ災いして困る。けれども、大地が揺り動くと、とても人間はどんな力をもつてもかなわない。日本は火山国だよ。私は詩にも書いたでしょ。火山国の民族が、火のような情熱を持たないでどうするか。我々は火山国民だからね、聖霊の火が燃えていなくては。クリスチャンなんて言つたつて、くすぶっているようなのはクリスチャンではないんだ。

● 本当の「自由」

パウロはキリストの霊火に、霊撃に遭つて、本当にひっくり返された。「キリスト・イエスの僕」とは、

「もう参りました！ 私はキリスト・イエスに参つた者です」

というんだ、この「僕」というのは。これはもう、参つてしまつて、

「絶対に従つて行きます、従わざるを得ません」



ということなんだ、この「僕」という字は。あなた方は名詞を動詞化して読まなくてはダメだよ。「僕」とは何ぞや。「参りました、従わざるを得ません」という字であります。相手は絶対者ですよ。相手が絶対者で、

「参りました！ 従わざるを得ません」

と言うと、今度はそこに本当の「自由」がある。自分が持っているような、相対的な、人間的な自由なんていうものは、すぐ自己にとらわれて、反って不自由なことになってしまう。ところが、本当の自由は自己にとらわれないんだから。自己に囚われないのを自由という。ところが、普通の自由はみんな自己本位の自由でしょ。それは勝手気儘というんで、ちつとも自由ではない。だから、「僕」という言葉の奥は「本当の自由者」ということです。

ルターはこの言葉の中に、

「謙虚と高邁こうまい（デームート ウント ホーハイト）という言葉が隠れている」

と言っている。謙虚なことを「デームート」とドイツ語で言います。「ホーハイト」というのは悪い意味では高ぶりになる。けれども、心の高然、浩然としていることを「ホーハイト」という。

●キリスト僕・キリスト婢

「キリスト・イエスの僕」と言う。「キリスト」と言うときは、正に霊的な存在がキリストです。「油注がれたる者」ということ。「イエス」というと、受肉したキリストです。だから、「キリスト・イエス」と、本当は両方言わなくてはいけない。しかし、もう我々にとっては、受肉したキリストは今天界に往ってしまっているから、「キリスト」だけでいいわけです。ただし、「キリスト」という言葉の奥に、本当に受肉して地上に現れて驚くべき神の実存をもつて一切を救にもたらした、その具体的な事態が「イエス」という言葉です。キリストは「ガイスト」（霊）、イエスは「フライシュ」（肉）です。ただし、この「肉」は、このイエスというの、我々が持っている生まれつきの「肉」を持ちながら、その「肉」に完全に勝っているところの存在です。彼だけがそのことを果たした。だから、救主になった。

「キリスト・イエスの僕」というのはパウロさんじゃないんだ。こつちだ。あなた方一人ひとりです。だから、私は「パウロ」という言葉をここに書かなかった。「キリスト者」とか、「クリスチャン」なんて言うより、「私はクリスチャンです」なんて言うより、

「私はキリストの僕でござる」

と言った方がいい。キリスト僕、キリスト婢と（笑）。なにもそんなことを言わなくていいけれども、そういう気持ちでいてください。

真理というものは、日々に新たに臨んで来る。そういう表現を私たちに与えて来る。で、き上がったものじゃないんだ。カントが

「哲学は哲学することである」



と言った。

「神学は神学することである」

と私は言いたいわけです。でき上がった神学を覚えることでも何でもない。

この「キリスト・イエスの僕」という最初の一言だけで、もう福音が含まれてしまっている。そういうのをみんな軽い気持ちでただ読んでしまっている。聖書の一句一句というのは、そんなに読めるものではないですよ。

●使徒

「……召されて使徒となり

とある。キリストに呼ばれて使徒となった。よく「使徒職」という言葉がありますが、あの「職」の字はいらない。ルターにもちよつとその癖がある。パウロがちよつと使徒職的なことも言っているものだから。「職」というのは、本当の意味では職だつていい。天に呼ばれたものを「天職」という。天賦^{てんぷ}天職と私も言つてますけれども。「天」の字がなかったらダメだよ、ただの「職」では。呼ばれたる任務がある。

召されて福音を宣べ伝える者が「使徒」です。その当時、十二使徒がいたけれども、あれはまだ本ものじゃないんだ、キリストに選ばれたつて。聖霊が本当に来て、自分でそのことを告白するまでは、本当は十二使徒でも何でもない。本当の使徒はやはり、ペテロとかヨハネとかパウロとかいうご連中が本当に使徒です。自分に本当のその自覚がなかったらダメなんだ、いくらキリストに言われたつて。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ。この四人だ。四人柱です。

なお、その当時の一般の聖霊を受けた伝道者のことも、やつぱり「使徒」と広くは言つていたようです。「アポストロス」です。

●福音の中へと

「……神の福音のために選び別たれたるパウロ

同じことを別な言葉で言っただけのはなしです。「福音のために」と言うけれども、「のために」では本当はちよつと弱い。ギリシヤ語では「エイス」(の中へ)という言葉が使つてある。パウロはギリシヤ語で書きましたから。もちろん、パウロが書いたと言つたつて、これはみんな口受しているんですよ。大体、パウロの手紙はそうです。だから、凄いです。もう溢れてくるから。それをどんどん書かせているわけです。それでこんな立派なことを言つてしまうんだからね。パウロも自分で後で驚いているのに相違ないんだ、「俺はそんなことを言つたかな」なんて。神の真理が、キリストの霊に捕まえられて、溢れてしょうがないから語っているのがこの手紙です。学者の頭でいくら分析したつてわかりっこないんだ、分析では。本当は、



「神の福音の中へと」(エイヌ ユーアンゲリオン テウー) なんです。「福音の中へと選ばれた」ということ。これもやはり受け身の完了の分詞形で書いてあります。

「福音の中へと選ばれたる者」

結果的に訳せば、

「選ばれて、福音の中に入れられた者」

なんです。

「何か知らんけれども、このしょうがない私を神さまは選んでしまった。そして、

福音の中へと入れてしまった」

というようなわけです。英語の「ツー」とか「アンツー」は時々、結果的に訳すが、あれと同じだ。ドイツ語もそうだ。

「神の福音の中へと選り別たれたところのパウロ」

ということ。パウロはもう、福音の化身けしんであります。彼がものを言えば、福音しているわけです。「ユーアンゲリゾマイ」と言う。

●キリストという福音

2 この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預め御子あらかじみこに就きて約し給いしものなり。

これも、この中身を全部言おうとしたら大変だ。旧約聖書からキリストの預言を引っぱつてこなければならぬ。とても一時間やそこらではできやしない。

「預言者たちにより」と。旧約の預言者たち、アモス以下の預言者たち。いつか、「ガリラヤ湖」という文章を『ハレルヤ』誌に書いたでしょ。ガリラヤ湖という言葉をもってキリストを私は表現したわけです。そこに流れ込んでいるいろんな支流、それはちょうど預言である。あるいは、それは太陽の光のように。いろんな預言者の預言がみんなキリストという湖の中へ流れ込む。そうすると今度は、キリストから使徒たちを通してまた光が流れていくような具合に。だから、

「聖書は我につきて証しするなり」

とキリストが言われたのは、

「旧約聖書は私のことを言っているんだ」

ということ。キリスト中心です。

「福音というものは旧約聖書の中に預め御子について約束していたところのものである」

と。だから、キリストは正に福音体です、福音の現象体です。「キリストの福音」じゃない、「キリストという福音」なんだ。



だから、キリストという福音をいくら研究したって、それではキリストという福音の中へは入れない。キリストという福音は、キリストを私たちのうちに宿すまではダメなんです。そして、私たちがキリストという福音体と同質的になつてこなければ。

あなた方はなにも卑下することはない。

「あの人はギリシヤ語やヘブライ語ができて、いろいろな参考書が読めて、神学のことがかつていいなあ」

なんて、何を言うか。あなた方自身が――本当に聖書一卷でたくさんだ――本当に聖書を身読して、キリストという福音体を生きれば、そこに生きていれば、神学者何者ぞということになる。私は「神学、神学」なんて言うけれども、神学にちつともこだわっているんじゃない。本当の神学は神学をあげりますから。

2……聖書の中に預め御子に就きて約し給いしものなり。

御子は即ち旧約を全うし、旧約以上の世界をそこに現象しているわけです。旧約をアウフヘーベン（止揚）してしまった。

3御子は肉によれば、ダビデの裔より生れ、⁴潔き靈によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、即ち我らの主イエス・キリストなり。

さすがにパウロの言葉だね。

●矛盾の構造

マタイ伝1章1節を見ると、キリストの系譜が出てますね。

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」

と。肉によればダビデの子なんです。けれども、「ダビデの子」なんて言ったって、これはマリヤの夫ヨセフまではいいけれども、ヨセフから生まれたとは書いてない。「このマリヤより」と書いてある。前は男の名前が出て、そしてそれから生まれたように書いてある。その子として書いてある。ところが、こここのところは、

「此のマリヤよりキリストと称うるイエス生まれ給えり」

と。そここのところは「ヨセフから」とは書いてない。系譜の上ではなるほど一応、ヨセフは夫だけれども。系譜の上では即ちユダヤ人であるということ。マリヤだつてユダヤ人だから。それが「肉によれば」ということ。ところが、「聖き靈によれば」、聖靈によれば、これはマリヤという乙女を通して霊的なキリストが現れてきた。矛盾の構造です。

「我はアブラハムより前にありしなり」

という天界のキリストは「靈なるキリスト」、ロゴス・クリストスです。プニユーマ・クリストス、靈なるキリストです。それが我々と同じ肉体、受肉体になった。我々と同じ、飲み食い、笑い、泣き、という弱き人間の姿をもつて現れた。これが「肉によれば」という



こと。

パウロは「自己本位」の人間のことを「肉」と言う。そういった自己本位の人間、即ち「罪びと」と同じ姿になってきて現れている。この「肉」というのは、「肉体を持ったところの、生来の人間」と同じような気持ちで「肉」という。ただの肉体のことじゃない。我々は罪にいくらでも誘^{いざな}われる。地上のキリストは非常に危機的存在だ。へたすると、「わが意^{いざな}」になつてしまう。ところが、「わが意」はダメなんだ。

「汝の聖意を」
みこころ

と言って、いつも本願を受けとつていた。即ち、「霊」なる「神本位」の生活を自分の中心とする。その意味においてキリストは、地上のイエスは霊肉の二重構造になっています。

この「霊」はいわゆる我々の持つている霊魂の霊じゃない。間違えては困る。我々の持つているところの霊魂や精神、魂や心というのは、みんなこの「肉」の中に入っている。ここに言っている「霊」というのは「神の霊」ですから、間違わないでください。聖霊ですから。

聖霊を宿しているところの「肉」なんです。聖霊を宿している肉体なんだが、いわゆる肉じゃない。肉の姿をしているけれども、我々と同じ危機的存在でありながら、霊が完全に勝っている。だから、

「義人なし、一人だになし」

という中で、「彼だけが義人であった」ということは、生まれつきの我々と同じ自己本位の構造を持つていながら、完全に神本位になっている。神一切になっているところのひと。一切と言ったって、手放しの一切ではない。いつも祈りの世界で神と交わって、神の霊を受けとっている。だから、時々そのことがはつきり現れていた。受洗の時にキリストは「悔い改め」でなくて、「聖霊のバプテスマ」を受けられた。また、山上においては変貌してしまった。そういうことが現象する。そして、キリストは人間の弱さをちゃんと知っている。そういう感覚は持っている。でなければ、ああいう言葉は出てこない。もしそうだったら、無縁の人になってしまう。

けれども、地上のイエスが神の聖意を完全に為して、彼は神の義を現したわけでしょう。神の義を現した彼が十字架にかかったとは、これくらい矛盾したことはないわけだ。義人が極刑を受けたなんて。義人を極刑に処するようなのが、我々罪びとの自己本位の人間の動向なんだから。我々の本質はキリストを十字架にかけるようなものを持つている。それをキリストは、

「お前たちの本能は私を十字架にかけることになっているけれども、私はお前たち

のその自己本位の本能を、罪を完全に受けとってしまったから、心配いらん」

というのが十字架ではないですか。それでもう完全に甦^{よみがえ}って、彼は天界へ行ってしまった。その贖罪の大業を果たしたら、キリストは甦^{よみがえ}らざるを得ないひとです。



「本当に甦っただろうか？」なんて言っている者は十字架がわかってない。昔はそういう論文がよくあった。一生懸命で福音書を照らし合わせて、

「いろいろ言っていることが違うではないか。これは本当か。錯覚ではないか」

なんて。キリストの本質がちつとも読めてないから、そういうことを言う。相対的人間の宗教的天才が十字架にかかったくらいにしか思っていない。

●死に至るまで二重構造

だから、霊界のキリストの霊が我々の中に入って来たときに、初めて我々は「キリストの僕」ということが言えるんです。これが入って来ないうちに「僕」なんて言ったってダメですよ、そんなのは、力んだって。

4 潔き^{きよ}霊によれば、死人の復活^{よみがえり}により大能をもて神の子と定められ給えり、
即ち我らの主イエス・キリストなり。

「僕」という言葉と、今度は「子」ということがここに出てきた。我々もキリストと同質に霊が来ると、「神の子」なんです。「アバ、父よ」と言うことがキリストと一緒にできる。

どうせ地上では二重構造ですよ。これはルターも言ってる通り、

「我々は罪びとであり、かつ義人である」

という。死に至るまで二重構造です。二重構造であるけれども、心配する必要はない。「義人である」ということが絶対に「罪びとである」ことに本質的に勝っているから、救は確かなんです。自分の実存じゃないですよ。絶対恩寵の世界です。だから、

「信仰によって義とされる」

というのは、その意味において確かに真理です。キリストの救を本当に受けとっているから、義とされているんです。また、それが本当の義人になってしまふのは天界での話です。

それで、人はすぐ相対的な判断をする。「あれはクリスチャンのくせに、どうのこうの」と。そういうことを言っているやつは自分自身がダメになる。人間はみんな罪びとだよ。「クリスチャンのくせに」もへつたくれもないんだ。問題は、

「本当にその人が受けとって進んでいるか」

という、その姿です。どんなに滑っても、転んでもいいんだよ。生まれつき調子の悪い奴はすべったり、ころんだり、なかなか行かない。生まれつき調子のいいやつは、どんどん行く。楽なんです。しかしながら、自分と戦って進んでいく人の方が本当の神の子の姿をもっている。人の目には惨憺たるように見えても、神さまの方では、

「お前が本当の子供だ」

と仰る。人の目には立派に見えても、

「お前は本当に受けとってないじゃないか」

なんてなことにならないとも限らない。



我々は、地上に於ては義人と罪びとが互いに一緒になって生きている。地上における、義人と罪びとが一緒になつているところから――地上ではなにしろ、私たちは罪びとということが現実なんだ――けれども、霊界においては、完全に肉体を脱いしてしまうと、今度は本当に霊の世界です。しかしながら、これは、いきなり天国に行けるかは、そこはまだ分からんよ。ダンテが「煉獄」というのを書いているように。魂が、

「しばらく待て！」

なんて言われるかも知れない。まあ、そこらまで余り考えなくてもよろしい。けれども、本当に受けとつていれば、仮天国には入るよな。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

とキリストは盗賊に言つたね。あの入つて行つた「パラダイス」というのは仮天国ですから。本当の天国は歴史の終りにやつてくる。これは黙示録の終りの方です。それまでは仮天国と仮地獄。本当の地獄になつてしまうまではまだ時間があるかも知れない。

とにかく、地上の在り方をどこに次の世界へ置くかは神さまだけがなさるので、人間は誰も他の人を置くわけにいかない。

●聖名が中心

⁴ 潔き^{きよ}霊によれば、死人の復活^{よみがえり}により大能をもて神の子と定められ給えり、
即ち我らの主イエス・キリストなり。

これは完全に霊なるキリストです。しかしながら、受肉を通っているキリストだから、私たちをその聖霊は深く思いやつてくださる。

⁵ 我等^{めぐみ}その御名^{みな}の為にもろもろの国人^{くにびと}を信仰に従順ならしめんとて、彼より
恩恵^{めぐみ}と使徒の職^{つとめ}とを受けたり。

「職」なんていうことを言うものだから、どうも、とかく教会制度というようなことに、こういう言葉がだんだん躰きになつて、組織化していくようなものを持つてしまっているわけだ。パウロはどこまでも、そういったいわゆる組織をしようと思つていたんじゃないけれども、大勢になると、やつぱりそういった役割というものが自然にできる。

ここのこんな小さな集会でもそれぞれ役割がある。けれども、それをいわゆる組織と思つてはいかん。どこまでも、有機体的構造です。5節のこれも、

「信仰の従順の中へと」

ということ。「御名の為に」ということが大事なことです。正に「ために」は目的です。ここは重い言葉がたたみかけて出てくるので参つてしまふ。どこまでも聖名が中心であり、目的であるわけです。聖名とか福音というのは、みんなこつちのためではないんだ。福音も聖名もみんな、発するところも、その経過も、またその目的も全部これが中心になつてなければダメなんです。自己の方に切り換えられたらダメになつてしまふ。



「信仰の従順の中へと」、「信仰と従順」と言いますけれど、別な言葉で言うのと、「信頼へと」でいい。信仰の従順というのは「信頼する」ことです。本当に受けとれば、従わざるを得ないと、さつき言ったでしょ。その従うのも、心から喜んで従うんですから、これは信頼なんです。いわゆる「服従」というと、「どうも仕方がないから服従する」なんて、それではダメだ。信頼してるんだ、はつきり。

5……彼より恩恵と使徒の職とを受けたり。

即ち、召されて人々にキリストを宣べ伝えるのが使徒の職です。

6汝等もその中にありてイエス・キリストの有とならん為に召されたるなり

これが正に本当の意味のキリスト者です。その中に在りて、そういった福音の現実の中で、キリストのものとなる。キリストのものとなるために召されたのである。

●召団

7われ書を^{ふみ}ロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる^{すべ}凡ての者に贈る。

「召された者」とは即ち、この世から呼び出された者です。「召命」という。呼びいだされている。「エクレシア」というのがそうなんだ。呼びいだされたる者たちの群が「エクレシア」、召されたる群です。だから、「召団」という。

神のものとされたことを別な言葉でいうと、「聖徒」という。もう既に聖者になっていることを聖徒というんじゃないですよ。カトリックの方の「聖者」というのはちよつと困るよ。立派なキリスト者のことを「聖者の域に入れるの、入れないの」とやっているんだ、カトリックでは。アウグスティヌスなんかも聖者になつてしまった。アウグスティヌスはそんなことを思っていやしない。死に至るまで、キリストの罪の赦しの恩寵を涙して彼は次の世界に往つたくらいな男だ。どうも、私はこの「聖徒」という言葉はあまりピンと来ない。「聖徒」なんて、チャンチャラおかしくなる。アッシジのフランチェスコだつてそうですよ。皆さん、彼は脱線した過去をもっている男だ。パウロでもみんなそうだ。けれども、本当に恩寵に生きて、もう自分を何ものともしないような気持ちで彼らなんです。それを「聖徒」なんて言われては迷惑なんだ、本当は。

聖者はキリストだけだ。そのキリストすらも、

「私をなぜ善いと言うか。神の他に善いものはないではないか」

と言つたじゃないですか。キリストは聖徒中の聖徒だよ。

坊さんたちもそうですよ。法然にしろ、親鸞にしろ。けれども、彼らは本当に如来の世界に生きていたらば、不思議なことが起きる。「だから、あれは聖者である」なんて、他のやつが余計なことを言っている。聖なるものは如来の他にいないんだ、仏教で言えば。どこまでもこちらを何ものかとしてはいかん。



自分を何ものかとした人は、どうぞ、この集会からどこか他の立派な集会に行ってください。ここはちつとも立派ではないんだ。塵芥なんだから。

そういう、逆説的な言葉です。もし、聖というならば、

「本当に神の聖はわがうちに生きているぞ。神の義は、神の愛は、キリストの愛は、キリストの聖は、私の中にあるぞ」

と。それだけ本当に澄んだ気持ちになります、もちろん。私は何も水を割っているのではない。真理の世界なら私は決して譲らん。ただ、こちらを、あるいは人を聖だとか義だとか愛だとか、言いたくないはなしだ。それは相対的には言ったつていいよ。けれども、本当のものはみんな上から来ている。何より神さまの御子キリストがそのことを仰っている。

「なぜ、私を善いと言うか」

なんて仰っているから。そういうキリストが完全にケタの違った、次元の違った実存であるわけじゃないですか。こんな愉快なことはないじゃないですか。

● 罪からの自由・愛への自由

7……願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

「恩恵と平安」という言葉がある。あるいは、「恩恵と真理」という言葉をよくパウロが使う。恩恵と平安はパウロの手紙にたくさん出てきます。パウロが

「キリスト・イエスより賜う恩恵」

という時には、内容はいろいろです。相対的な恩恵も恵みでしょう。しかしながら、一番パウロにとって恩恵というのは御霊の恩恵のことです。御霊がなければ本当の恩恵は恩恵ではない。御霊という賜物、キリストという恩恵体です。

そうすると、魂は本当の平安にくる。だから、恩恵が先です。「平安と恩恵」とは言わない。「恩恵と平安」と言う。必ずその順序です。そうすると、安らかさと力がある。平安の中には力がありますよ、ボヤツとしてるんじゃないんだ。縦の関係が立っているから。平和は横の関係です。どんな事があっても、心は揺れても、霊は揺れない。

これがパウロのローマ書1章の序言みたいなところだ。序言みたいなところだけれども、実は福音の内容が隠されていた。何と言っても、最初の言葉「キリスト・イエスの僕」に、皆さんの自覚はこの一語に尽きる。

「僕こそ本当の自由である」

ということをお忘れなくください。自由は必ず愛に働く。これはルターが『クリスチャンの自由』で言っている通り、罪からの自由、愛への自由です。これが僕の姿です。

